
エルフの嫁さん（新・訂正版）

吉（よし）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルフの嫁さん（新・訂正版）

【Nコード】

N3558BA

【作者名】

吉^{よし}

【あらすじ】

バイクが大好きなフリーター。宮中^{みやなか}時^{とき}広^{ひろ}の元に、異世界から現代に迷い込んで来たエルフのお嬢様リサ。笑いあり？ 涙あり？ ハートフルラブコメディーを目指して頑張ります。逆異世界トリップファンタジー。あるようでなかった？ 事に挑戦します！ 「エルフの嫁さん」として以前投稿させて頂いておりましたが、PC大破や引っ越しなどが原因で1年近く放置をされていた小説を、心新たに執筆させていただきました。データはぶっ飛びましたが、頭の中のプロットはかすむことなくあるので新たに設定を煮詰め直し1

から文章に起こしていきます。前作を読んで頂いていた方もおまかな道筋はほぼ一緒ですが、楽しんでいただけたと思います。「エルフの嫁さん」原文は削除せず残してありますが、つたない文章力にネタバレにもなりますので閲覧はおすすめしません。

始まり始まり。

間もなく夜が明けようとしていた。

時刻にすれば5時頃だろうか。どこにでもあるコンビニの店内、そこであくびをかみ殺しながらダルそうに着替えている青年がいた。

パツと見ただけでは絶対に記憶に残らないであろう特徴の無い顔だ。背は平均より少し高め、痩せてはいないがその体は少し締まっていた。短めの清潔感のある髪をワックスで流している。

黒縁のメガネをかけるとまた眠そうにあくびをした。長い事深夜のコンビニでアルバイトをしているがいつまで経ってもこの眠気には勝てそうにない。メガネをずらすとあくびで少し出た涙を拭い、忘れ物が無いかを確認してからタイムカードを押しに行く。

「^{みやなか}宮中くん、お疲れ様」

人気の無い更衣室で声をかけられてビックリとしたが、もう1年以上聞いている声だ。振り返ると予想通りの人物が立っていた。この店の店長だ。特徴を上げるとするならば、特徴が無い事。あたりさわりが全く無く、思い出そうとしても思い出せない。そんな初老の男性が店長だった。

「店長もお疲れさまです。かなり少なくなってきた品物をメモしておいたんで後で目を通しておいて下さい」

「いつもありがとねえー。良かったらこれ持ってって」

そう言って手渡されたのはカップヌードルとお茶が入ったコンビニ二袋だった。丁度家にあつたカップヌードルが底を付いたので買い足して帰ろうと思っていたのでこれは非常にありがたい。

「おお！　ありがとございます。丁度家に食うもなくなつたばかりでして。それに給料日前ですし」

「それは良かった。じゃあまたよろしくね」

そして店長に礼を言い、帰路に付いた。

世間は不況の煽りを受けて観測史上最大の就職難だとか就職氷河期なんて言われている。

そして深夜のコンビニでアルバイトしている俺も世間受けの良い言い方をするならば就活生だ。実際はフリーターだが。就職氷河期の例に漏れず、しがない四流大卒の俺もたまに就活しては散々な結果にそろそろ心が折れて来ている。

誰だって働きたくはないし、必要最低限食える程度にバイトのシフトを入れて後は家で転がってパソコンを弄ってるくらいしかやる事は無い。

そんな宮中みやなか時広ときひろこと俺は、くだらない事をウダウダと考えながら
僅かに活気づいてくる町で背を丸めながら歩くのだった。

突然、忽然、必然。

アルバイトをしているコンビニから歩く事5分程。徐々に住んでいるアパートが見えてくる。まるでそこだけ時代から置いてけぼりを食らったかのような佇まい。大正どころか明治時代からあるのではと錯覚しそうなほど古ぼけたアパート、それが今時広に住んでいるアパート「野差荘^{やさしそう}」であった。

六畳一間で風呂無しトイレ別。周りに新しく立ったアパートのおかげで日当たりは最悪。洗濯物を干すのにも一苦勞である。しかし風通しは抜群に良い。なにせ築何年か管理人すら知らないこの建物は建てつけというものが恐ろしく悪く、隙間風が通り放題だからだ。冬は寒くて夏は暑いを地で行く、住人にはカケラも優しくない。そんなアパートが「野差荘」だ。

このアパートは玄関口の扉から入ると建物の真ん中に廊下が通っている。雨の日も玄関を抜けてしまえば濡れる心配が無くそこはこの建物の良い所ではないだろうか。その廊下を境に左右対称に部屋が並んでいる。古い家屋に興味のある人ならば一度は住んでみたいと思わせるような古い木造建築特有のレトロな良い雰囲気漂っているが、住んでいる本人からすると新しい家に住みたいと思ふ事は然るべき感情かもしれない。

時間が時間なのであまり物音を立てないよう慎重に廊下を歩くと一 四号室。時広の部屋があった。部屋番号が四番で角部屋、しかも築何年かわからない古い建物で曰く付きと言われても過言ではない部屋であるが当の本人はあまり気にしていない。住み始めた当初

は天井のシミなどに一タビクついていたが、さすがにもう慣れた物だ。西洋風なドアノブにピッキングの技術など無い時広でも開けられてしまうのではないかと思うほど簡素な鍵を通すと少し苦戦はしたが開いた。この鍵が曲者で内部が錆びているのではと思うほど開かない時がある。住み始めた当初は悪戦苦闘して30分や1時間も鍵を開けるのにかかったが、こちらも慣れた物でもものの数分で開くようになった。ある意味防犯か？ と思ひもしないが一役買っている事は間違いないであろう。

ドアを開くと一人暮らし特有の足の踏み場もない時広の自室が待っていた。飲みかけのペットボトルや食いかけのカップヌードル。雑誌やコンセントの配線。触れただけで崩れてしまうのではと思うほどうずたかくゴミが積まれたテーブルの上。いつ干したか忘れてしまった万年床にはタバコの焦げ跡がかなりあった。

しかし、そんな汚い部屋であるが壁には数々のポスターやカタログの切り抜きがはられたコルクボードなどが飾ってあった。バイクレースの選手がバイクをフルバンクしてコーナーを駆け抜けているポスター。カタログの表紙を切り取って数々の名車が壁一面に張られている。

宮中時広は大のバイク好きだ。三度の飯よりバイクを弄る事が好きで、バイト代もほとんどバイクにつぎ込んでいる。家賃よりも高いバイクガレージを借りておりそこに愛車は止まっている。どんなツライ事があってもバイクに跨ればすぐにスッキリしたし、バイク弄りをすれば時間を忘れられた。クロームステンの輝きにどんな音楽なんかよりも心地よい排気音。それだけあれば十分であった。

それからしばらくしてテーブルの上のゴミをまとめてゴミ箱に放り込み、食事ができるだけのスペースを確保すると電気ケトルでお湯を沸かしカップラーメンに注ぐ。待っている間にバイク雑誌の新作を読み、やはり今の時代の偉い人は効率を求めすぎてバイクをおかしな方向に持って行っているのではと不安にかられる時広。排他的な事こそに美学を感じるし、利便性をとことんまで突き詰めればそれはもう車で良いのじゃないかと眉間にシワを寄せながら唸る。セミダブルクレードル鉄パイプフレームこそ排他的で非合理的なバイクの真骨頂だと豪語する時広にとってカウリングで固められたバイクなど愚の骨頂だと一笑に付す。

セットしたタイマーの音が鳴り麺が茹で上がった事を確認すると液体のスープを入れ混ぜる。とたんに良い香りが部屋を包み食欲も増す。さて、これを食べたら惰眠を貪るか、と幸せな予定を頭の中で立てつついにやける時広だったがふとした異変に気付く。

突然に、忽然と……。そして必然に出会う。

これが彼らの、始まり、始まり……。

プロローグ 終了

そして出会う（前書き）

地震についての描写があります。

これは架空の日本の物語です、実在する人物や建物などには一切関係ありません。

気分を害される方がいらっしゃるかもしれませんが、まえがきにて失礼。

そして出会う

カタカタカタッ。

最初はトラックでも通ったのかと思った。何度も言うようだがこの古い家、前に通っている道路に大型車が通っただけで家鳴りがするのだ。大型地震なんて来た日にはすぐさま倒壊するのでは、と時々は思っている。

しかしトラックが通っただけにしてはやけに長く家鳴りがしている。地震か？　と思っただが蛍光灯の紐が揺れてない為にやはり思い過ごしか、と割り箸を割る。古い家に住んでいるとこんなことに気を留めていたらにっちもさっちも行かなくなるからだ。

いただきます。とラーメンに手を付けようとした時、ブルツと震えた。

「なんかいやに寒いな？」

元々冬は寒いのがこの家の標準装備であるが、ある程度ダンボールなどで隙間風を通さないような工夫はしている。それでも風は通ってしまうのだが。

しかし今は体感的にいつもより寒い。なぜだろうと一瞬悩むが、ご飯を食べれば体も温まるだろうと麺をすすりはじめた。

やけに続く家鳴りに寒い部屋。嫌な予感を覚えながらも空腹を満

たす為にラーメンをすする。二口ほど食べればそんなことすぐに忘れていた。

しかしここでさらなる奇異が時広を襲う。

ドンッ！ とまるで軒下から大きな槌で殴られたかのような衝撃を覚え、テーブルに積まれていたゴミが落ちる。さすがにこれだけ大きな衝撃を受けた時広も異常事態だと辺りを見回す。

すると突然蛍光灯が明滅を始めた。

なんだなんだと、まるでポルターガイスト現象のような異常事態に訳もなくあたふたしていると家鳴りが激しさを増す。そして音が聞こえるほどの強風が部屋を駆け抜ける。雑誌は飛び、ポスターはがれ。目もあけられないほどの強風が時広の自室に渦巻きます。

パニック状態になった時広はせめてラーメンだけでも、と必死にラーメンを掴んでいるが強風のせいで汁が飛びまくっている。

「局地的な竜巻かこれええええええええええ！！！」

メガネも飛び、唇もジェットコースターに乗ったかのように広がっている。中々におもしろい顔だ。

そして強風に煽られた分厚い週刊誌が時広の顔面に直撃するが、自分が飛ばないようにするだけで一生懸命の時広は既に中身などとうの昔に飛んで行ったラーメンの器を必死に抑えており痛みにもがき苦しむ暇もない。

薄目を開けて超強風の中にある自室を見回す時広はだんだんとそ

の強風に煽られているのか部屋のゴミが空中に円を描くように回っているのを見た。

まるでゴミが意志を持っているかのようにグルグルグルグルと回っていて、強風もその中心部分に向かって渦巻きながら吹いているようだった。

右から左に流れていく超強風に煽られ髪の毛はすごい事になり、顔の皮膚という皮膚はすべて左側に寄っていた。

そしてその中心部分が光を帯びてくる。ものの数秒で目を開けることも困難なほどの光の量になるが、目をあけているかどうかすらわかってない時広にとってはどうでも良い事だった。

家鳴りがピークを迎え、超強風もわが物顔で時広の自室を狂喜乱舞している。そして明滅する蛍光灯に飛び交うゴミ。時広の我慢も既に尽きかけていた時、まるで核爆発のように光が一気に中心部分に集まったかと思うと、そのタメを使ったかのように爆発しゴミが四散した。

さきほど食していたラーメンの麺をあたまからかぶり放心状態の時広はやつと竜巻が去ってくれた事に安堵しており、しばらく頭が付いてこなかった。

1分ほど時広は放心していたが、部屋の惨状を思い出し弾かれるように動き出した。とにかくポスターはかなり大事だ。もう手に入らないカタログの表紙の切り抜きもあったし……などと思いつつ部屋の片づけをしようとすると、とんでもない事に時広は気付く。

「……なんで女の人が寝てんだ？」

時広の万年床の上にそつと横にされたようにぐっすり眠る女性がいた。

所々汚れているが、淡いグリーンと白のグラデーションが綺麗なワンピースを着て。腰より長い綺麗な銀髪、光の角度によっては少し青みがかって見える。そして完璧なる黄金比で置かれた顔のパーツに、シミシワ荒れなんかカケラも見られない真珠と大理石を掛け合わせたような白く透明感のある美しい肌。手足は長くスラッとしており、軽く10頭身はあるのではと思わせるほど顔も小さい。

そしてなにより目を惹くのはその長く尖った耳。まるでおとぎ話から出てきたエルフのような存在に、神々しいオーラを放つ女性を前にただ茫然とするしかない時広。

さきほどから異常な事態が立て続けに起こっていたからか、またも時広は放心状態となり頭を抱えていた。

「どうなってんだよ……」

そんな彼の嘆きを聞く人は、ここには居なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3558ba/>

エルフの嫁さん（新・訂正版）

2012年1月10日21時54分発行